

2008年度秋学期レポート

日本ASL協会実施・日本財団助成
聴覚障害者留学事業

第2期奨学生

Master of Social Work, Gallaudet University

精神保健福祉士 高山 亨太



はじめに

今学期のクラス構成は、私の留学目的であるろう・難聴者への心理社会的支援方法、さら
にろう・難聴者支援の専門家教育システムやカリキュラムを学ぶことができた実感してい
る。

秋学期のスケジュール

秋学期は、これまでの生活習慣を変えて、今まで6、7時起きだったのを5時に起きるよ
うにした。理由としては、宿題などをするときには、クラスが終わって疲れた後ではなく、
やはり、クラス前の朝が一番書きやすいと気づいたからである。やはり、クラスというのは、
ディスカッションなどもあり、体力が必要となり、夕方以降は必然的に疲労と眠気がひどく
なるのが常である。起きる時間を早くした結果、コーヒーを飲む量が増えてしまったが、宿
題をこなすには十分な時間が確保できるようになった。

表1 秋学期のスケジュール

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	週末
5a. m.	起床・朝シャワー・朝食・コーヒー					睡眠中
6a. m. - 9a. m.	予習・宿題など					
9a. m. - 12p. m.	予習・宿 題	School Social Work Practice	調査	Human Behavior and Social Environment: Deaf and Hard of Hearing	Independ ent Study	起床
12p. m. - 1p. m.	昼食					
1p. m. - 4p. m.	Micro Social Work Practice: Deaf and Hard of Hearing	Macro Social Work Practice: Deaf and Hard of Hearing	調査	予習・宿題	Independ ent Study	買い物 や付き 合いな ど、ス トレス 発散、 日曜日 は特に 宿題な ど
4p. m. - 6p. m.	宿題もしくは、昼寝					
6p. m. - 7p. m.	夕食					
7p. m. - 12. a. m.	宿題やその他、シャワー					
12a. m.	就寝					

履修クラス

1. ろう・難聴者個別援助技術 (Practice with Deaf and Hard of Hearing Populations:
Micro Intervention) 月曜日 1時～4時

このクラスでは、ろう・難聴者のクライアントに対する心理社会的援助方法や各種心理・
社会理論の活用方法を学んだ。このクラスを担当しているDr. Carol Cohen准教授は、約30
年にわたって、ろう・難聴者への心理療法や精神アセスメント、家族療法を実践してきてお
り、クラスではロールプレイなどを中心に実践的な援助方法について学ぶことができた。具
体的には、心理社会的アセスメント、ナラティブアプローチ、認知療法、家族システム療法、
客観的療法や、さらに以前から自分自身でも実践しているソリューション・フォーカス・ア

アプローチ (Solution Focused Approach) などといった心理学分野でも応用されている各種援助技術と理論を理解した上で、ろう・難聴のクライアントの支援にあたってどのように適用することが可能なのかについて議論や学生によるプレゼンテーションを通じて学ぶことができた。

さらに、Dr. Carol Cohen准教授が担当するメリーランド州の精神保健福祉の専門家に対するオンラインワークショップのうちの1クラス(約2時間)を複数のクラスメイトとともにボランティアとして、パネルディスカッションを計画し、「聴覚障害を持つクライアントへのメンタルヘルス支援方法と聴覚障害者の社会的環境の理解」というテーマで一人のパネラーとして参加したことは、今後のろう・難聴者を取り巻く専門職への教育プログラムを計画にするにあたっての参考になった。

2. 学校ソーシャルワーク援助技術 (School Social Work Practice)

火曜日9時~12時

このクラスは、スクールソーシャルワーカーとしての経験が深い、Ms. Audrey Frank講師が担当した。現在、Ms. Audrey Frank講師は、Gallaudet UniversityのPresident Fellowとして、博士課程の学生をしながら、クラスを教えている。President Fellowとは、奨学金を支給する代わりにクラスを教えるという奨学金制度である。この奨学金の目的は、ろう・難聴者の博士号取得希望者を支援するとともに、将来のGallaudet Universityの教員になってもらうことを目的に設立された奨学金である。筑波技術大学でも、いずれ博士課程が設立された折には、このような独自の奨学金を日本財団などの協力を得ながら実施することができれば多くのろう・難聴者の博士号取得者が筑波技術大学で教えるという状況が出てくるのだろうと考えている。話がそれだが、このクラスでは、特にろう学校における学生や家族を対象にしたスクールソーシャルワーカーのあり方や援助技術について学んだ。毎回、ろう学校での各種状況やろう・難聴児、その家族の個別的集団的事例を想定しながら、ロールプレイなどを通じて各種分析・援助方法について学んだ。さらに個別支援計画の目的や作成方法についても深く学ぶことができた。



また、Dr. Carol Cohen准教授と同じように、メリーランド州の精神保健福祉専門職へのオンラインワークショップのうち、Ms. Audrey Frank講師が担当する「ろう・難聴児を抱える親の理解とその支援方法」というテーマを教員とともにクラスメイトと一緒に進行や質問内容を議論し、当日のパネルディスカッションを運営した。当日は、ろう学校に通う子どもを育てているろうの母親、難聴児のためのプログラムがある通常学校に通う子どもを育てているろうの母親、聴者の子どもを育てているろうの母親、ろう学校に通う学習障害を抱える子どもを養子として育てている聴者の

父親、ろう学校に通う子どもを育てている聴者の祖母がパネラーとしてそれぞれの状況や支援課題などについて聞くことができ、子どもだけではなく両親の支援も重要であることを再認識させられた。

3. ろう・難聴者福祉政策援助技術 (Practice with Deaf and Hard of Hearing

Populations: Macro Intervention) 火曜日13時~16時

個別援助や政策立案など様々なレベルでの心理社会支援の経験が深い、Dr. Martha Sheridan教授によるこのクラスでは、ろう運動や地域福祉などの国家、コミュニティレベルでの援助方法・政策理論を習得することが主な目的である。実際には、講義形式だけではなく地域のろう・難聴者の教育や福祉の向上に寄与するプロジェクトに参加して、様々な専門家や団体と協働する中で、理論と実践を学ぶなど、実践的な学習にも重点が置かれているクラスであった。教授が用意した3つのプロジェクトのうち、私は、メリーランド州における「ろう・難聴者を対象としたメンタルヘルスプログラムの再編並びに再開発に伴う各種事業

の推進」のプロジェクトに3人のクラスメイトとともに参加した。プロジェクト実施にあたっては、メリーランド州の知事の下に設置されているろう・難聴者局（Office of the Deaf and Hard of Hearing: ODHH）の主導の元に、ろう・難聴者専門の医療ユニットがある Springfield Hospital Centerという古い精神科病院に出向いて、そこに入院している14名のろう・難聴者を対象に彼らのおかれている状況についてインタビューを実施した。その結果を、12月4日の理事会にて、報告し今後の活動方針についてどのように州政府に訴えていくのか議論し、私たちのプロジェクトは終了した。

4. ろう・難聴者の人間行動と社会環境の問題（Issues in Human Behavior and the Social Environment: Deaf and Hard of Hearing Populations）

このクラスは、教授の中でも特に発達心理などに詳しく、その道の専門であるDr. Martha Sheridan教授による講義が中心であった。クラスでは、主にろう・難聴者を取り巻く状況について理解するために発達心理学や社会学などの様々な領域におけるろう・難聴者の心理発達と社会的な問題について学んだ。さらに、ろう社会における人工内耳に関する議論について、理論的に検討し、どのように人工内耳装用児・者を支援していくのかについても学んだ。

5. 自由研究-薬物乱用に関する教育：言語的文化的介入（Independent Study-Substance Abuse Education: Linguistic and Cultural Intervention）

このクラスは、必修ではないが、同級生と二人で、ろう・難聴者の薬物・アルコール問題が専門であるMr. James Schiller講師の指導の下で、自由研究で「薬物乱用に関する教育：文化的・言語的介入（Substance Abuse Education: A Cultural and Linguistic Intervention）」として、日本のろう・難聴者に関わる専門家への薬物・アルコール乱用についての知識や支援方法に関するトレーニングプログラムを開発することがこのクラスでの最終目標であった。最終的には、手話動画とパワーポイントを活用した専門のソフトウェアを活用して、オンラインによる教育プログラムを開発した。オンライン教育プログラムは、日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会の協力を得て、会員向けに公開する予定である。今後の課題としては、オンライン教育プログラムの評価と実践的検証が必要であると考えている。

インターンシップ

インターンシップ先がなかなかきまらずあせった時もあったが、最終的にはテキサス州にあるSouth West Collegiate Institute for the Deaf (SWCID) というろう・難聴学生のためのプログラムで、メンタルヘルス支援、特にアルコール・薬物乱用防止教育や心理社会的支援を中心にスーパーバイザー（ソーシャルワーク修士号（MSW）以上の学位を有する指導者）とともに、1月から4月末まで勤務する予定となっている。SWCIDは、Howard Collegeというコミュニティカレッジの1つのプログラムとして設立されており、簡単にいえば、NTID/RITの縮小版といった小規模な大学である。おおよそ、100人ほどのろう・難聴学生が在籍しており、さらに手話通訳学部があるため、聴者の学生も在籍している。アメリカでは、主に多くのろう・難聴学生が在籍する大学としては、Gallaudet University、NTID/RITやCalifornia State University, Northridge (CSUN) が有名であるが、SWCIDのような小さな大学に通ってから、前述の大学に進学、編入学する学生も多いようだ。学生の進路としては、進学や就職など様々である。日本のろう社会では、意外に知られていないが、Gallaudet Universityと同じ2006年に学生による聴者の管理職や大学のシステムの改善を求めるデモが起こっている。NTIDやGallaudet UniversityのMental Health Centerでのインターンシップと比較し、検討した結果、柔軟的に多くの経験ができる可能性のある小さなろう・難聴者のためのコミュニティカレッジでインターンシップをすることに決めた。テキサス州には、まだ行ったことがなくどのようなところなのか想像もつかないが、春学期からのインターンシップを楽しみながら、有意義な時間を過ごしたいと思っている。

ASLPI

ASLPIという大学院生が受験しなければならないアメリカ手話の評価試験を受けてきた。このASLPIの試験方法というのは、30分ほど1対1でインタビュアーから質問などを受けなが

ら会話をし、その録画ビデオをもとに文法や語彙力などの5項目について3名の評価者によって5段階で評価されるというシステムである。学期中に一度だけ受けることが出来、2007年度はトータル評価で5段階中2ポイントだったが、今回はほぼ2.5ポイントとなり、少しだけASLの能力が伸びたようだ。

アメリカ合衆国大統領選

これまで、おおよそ2年ほど続いたアメリカ合衆国の次期大統領の選挙活動も最後の追い上げの時期になり、テレビなどのメディアでは「マケインVSオバマ」のような見出しが連夜続いていた。黒人人権運動のリーダーであったマーサー・ルーサー・キング牧師が「I have a dream」と言ってから45年、2008年11月4日にアメリカ大統領の選挙が実施され、最終的に黒人であるバラック・オバマが第44代アメリカ合衆国大統領選に当選した。アメリカ合衆国の歴史上、初めての黒人の大統領の誕生である。選挙中は、全米ソーシャルワーカー協会（NASW）などの対人援助専門職団体の多くがオバマの支援を表明するなどの多くのニュースがあり、興味深い選挙であった。オバマが当選した夜の大学構内では、当選に歓喜する学生もいれば、わずかではあるがマケイン落選に落ち込む学生も見られるなど、選挙開票当日をアメリカで経験することが出来たことは大きな経験になり、また思い出になった。



2009年1月20日に就身式が執り行われ、新大統領としての活動が始まるが、金融危機による不景気の影響で、オバマ新大統領は、大変な舵取りをせまられそうであるが、オバマ自身ももとは人権派弁護士として地域に根ざした活動をしていたその実力に期待したい。Gallaudet Universityとしても人権派大統領とその政府とどのように政策的に関わっていくのか、これから楽しみである。

日米交流事業

11月7日には、日本ASL協会が主催しているビデオライブチャットを活用した日米交流事業があり、奨学生としてGallaudet Universityの会場から参加した。この事業はDeaf Studies学部のDr. Mike KempのコーディネートのもとにGallaudet Universityの教授の講義をリアルタイムで、オンラインビデオチャットを通じて、日本の受講生が講義を体験することが目的となっている。第1回目はDr. Arlene Kelly准教授による「History of Deaf Women」の講義であった。アメリカにおけるろうの女性の歴史を知ることができ、日本でのろうの女性の歴史についても興味を持つようになった。日本で有名な聴覚障害をもつ女性というのは、おそらく難聴の西川はま子であろう。日本にもろう史学会というのがあるが、そこでもろうの女性の歴史がもっと取り上げられるようになれば、日本のろう社会にとっても大きな財産となるだろう。改めて、歴史を知ることの重要性を学んだ。

12月5日の第2回目は、Dr. Benjamin Bahan教授による「Understanding Deaf People's Culture and Senses」が実施された。この講義では、感覚（主に視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚）についてろう文化と織り交ぜながら、これらの感覚、特に視覚がどのようにろう文化や手話の中に根付いているのかについて概説していた。ろう文化や手話の中における視覚の役割について学ぶことのできた有意義な講義だった。

日本側の会場にとっては、休日の朝9時からという大変眠い時間帯に講義を受けることになっているので、多くの人が集まるのか心配していたが、知っているや懐かしい友人などの



面々が参加しており、ちょっとした挨拶ができた。本事業にコーディネーターとして協力していただいていたDr. Mike Kempは、2008年11月24日に逝去された。今後のアジアでの取り組みなど、多くの仕事が控えており、多くのろう社会が彼の力や経験を必要としている矢先の訃報にはただ驚くばかりである。どうぞ、安らかに。合掌。

ハロウィーン

10月31日は、近年、日本でもはやっているハロウィーンの日である。これまで、2年間あまり縁がなく、興味がなかったが、ルームメイトに誘われたことをきっかけに思い切って少しだけ変装して出かけてみた。ルームメイトの協力を得て考えた自分の変装のテーマは、「洗濯物をためすぎて、服装がなく、今から洗濯をしにいく格好」というわかりにくいテーマだった（笑）。

当日は、多くの学生がそれぞれ変装したりして、学内や街中が変装で賑わっていた。今年の変装は、元大統領候補であったマケイン陣営の副大統領候補のペイリンの仮装やマケイン陣営に対する中絶などに関する議論や銃規制、ブッシュ政権下でのイラク戦争に反対などの意味で、妊婦姿や銃を持ったカウボーイなどの仮装が人気だったようだ。その他に、ホラー系の格好をしている人も多かった。ジョージタウンで行われたハロウィーンパレードに参加してきた。8時ぐらいにパーティーに集合し、11時ぐらいになったらそのままジョージタウンに向かい、朝の3時頃まで騒いできた。



Thanksgiving Day

今年のThanksgiving Dayは、いつもお世話になっている社会福祉学部の教授に招待され、第1期生の池上さんと障害学生支援室の職員であるArthurさんと一緒にディナーに出かけてきた。当日は、午後4時頃に到着し、お待ちかねのディナーの時間までのんびりと過ごした。アットホームな雰囲気の中で、おなじみのアメリカの伝統的なThanksgiving Dayのディナーをたらふくごちそうになった。七面鳥、スイートポテト、サラダなど様々な料理があり、本当においしい食事をいただいた。食事の後は、教授や教授の家族とお話したり、ゲームをしたりして過ごしていたらあっという間に11時になってしまった。学校で見る穏やかではあるが厳格な雰囲気のある教授の知らない面を知ることが出来たり、将来に関する悩みを聞いてもらったりすることができ、とても楽しいディナーだった。Arthurさん自身は、盲ろう者であり、アメリカ盲ろう協会会長の会長でもある。長らく、障害学生支援室の専門職員をしており、障害学生支援室のシステムの様子や自身の引退後の予定など様々なお話を聞かせてい



ただいた。自分にとって、慣れない触手話を使いながら、いろいろと参考になるお話を聞かせていただくことが出来、充実した時間だった。

まとめ

今学期は、時間的に余裕ができ、自分が取り組みたいと考えていた薬物乱用に関する教育などについて学ぶことができたり、ろう・難聴者やその家族への専門的な心理・社会福祉支援の方法や施策について学ぶことができ、当初からの留学目的の1つについて経験から考えさせられた時期であった。ここで学んだことはあくまでも大学院修士課程のレベルであり、社会福祉専門職教育のシステムが違う日本の状況でそのまま適用することは難しいことは明確である。これからは、帰国後にどのように日本のろう・難聴者に関わる専門職への教育プログラムを作っていく、どのように広げていくのかについて考えていく必要があると考えている。

